

訪問看護サービスの利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した、連携のしやすさと利用者へのケアにおける目標達成度との関連

| | |
|---------|---|
| 著者 | 阪井 万裕 |
| 学位授与年月日 | 2016-03-24 |
| URL | http://doi.org/10.15083/00073829 |

博士論文（要約）

訪問看護サービスの利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した、
連携のしやすさと利用者へのケアにおける目標達成度との関連

阪 井 万 裕

論文の内容の要旨

論文題目 訪問看護サービスの利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した、
連携のしやすさと利用者へのケアにおける目標達成度との関連

氏名 阪井 万裕

序文

複数の慢性疾患を有する在宅療養者には、そのケアニーズの複雑性から複数の専門職による総合的なケアが必要である。そのため、多職種連携の充実を主軸とした在宅医療介護サービスの質の確保方策が検討され、日本では在宅医療と介護の連携推進事業が多数展開されている。一方、多職種連携を充実させることは、望ましいアウトカムを得るための方策として必ずしも有用でないことが複数の研究で報告されており、多職種連携がどのような場合に利用者のアウトカムの向上により効果的であるのかを詳細に検討した報告や研究はない。そこで、本研究は、多職種連携において中心的な役割を果たす訪問看護師からみた連携に着目し、訪問看護師と訪問看護師以外の専門職との連携しやすさが利用者へのケアにおける目標達成度を高めるのは、目標達成に向けて行うケアがどのような特徴を有する場合であるのかを明らかにすることを目的とした。

方法

2つのフェーズで構成される、混合研究法の順次的埋め込み説明デザインを用いた(図)。第1フェーズでは、縦断前向き質問紙調査を行い、利用者に立案された目標をケアの特徴によって質的に分類した後、連携のしやすさと目標達成度との関連について量的な検証を行った。第2フェーズでは、目標毎の具体的な経過を知るためインタビュー調査を行い、最後に、質問紙調査の結果とインタビュー調査の結果を統合し、質問紙調査の結果についてさらに深い解釈を行った。

調査対象は、千葉県にある訪問看護事業所12カ所に勤務する受け持ち訪問看護師であり、利用者または介護者から同意を得た上で、すべての包含基準を満たす利用者のデータを収集した。

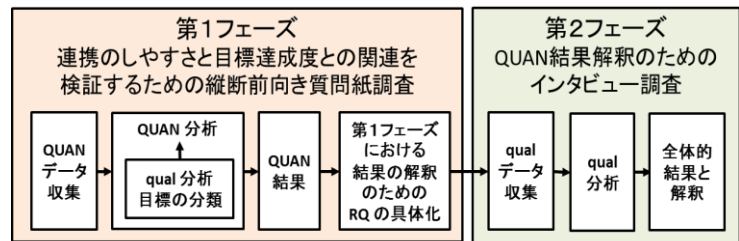


図. 本研究の手順を示す視覚的ダイアグラム

注: 図中の略語はQUAN:量的、qual:質的、RQ:リサーチ・クエスションを示す

包含基準は、1) 40歳以上の者、2) 2014年6月～11月に訪問看護の利用を開始し、過去6か月間に調査事業所での利用がない者、3) 利用者または介護者による調査参加への意思表示が可能な者、4) 利用開始から1～2ヶ月のうちに著しい病状悪化が予想されにくい者とした。東京大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号10446）。

① 縦断前向き質問紙調査

2014年7月～2015年3月に調査を実施した。訪問看護開始から1ヶ月時点（T1）と、4ヶ月時点（T2）に受け持ち訪問看護師が質問紙調査に回答した。T1では、受け持ち訪問看護師は、事業所・受け持ち訪問看護師・利用者の基本属性に関する調査項目と、利用者ケアする上で関わる専門職との連携のしやすさ（日本語版 **Relational Coordination Scale : J-RCS**, 得点範囲1～5点）に回答した。さらに、利用者毎に目標（一利用者あたり最大4目標）を立案し、立案した目標毎に目標達成度評価ガイドを作成した。T2では、T1で作成した目標達成度評価ガイドに基づいて、予想より低い成果(-2)、予想よりやや低い成果(-1)、T1における利用者の状態(0)、予想よりやや高い成果(+1)、予想より高い成果(+2)の5段階で目標の達成度を目標毎に評価した。分析では、まず、ケアの特徴によって目標の分類を行った。次に、調査変数の記述統計量を算出し、従属変数を目標達成度、独立変数をJ-RCSスコア（利用者にケアを提供する上で関わる専門職数を分母、各職種とのJ-RCS得点の総和を分子として算出する）、利用者の属性、ケアの特徴とする二変量解析を行った。最後に、連携のしやすさと目標達成度との関連を明らかにするため、利用者IDを変量効果とする線形混合モデルに、二変量解析で目標達成度と $p < .30$ で関連のあった変数、J-RCSスコア、J-RCSスコアとケアの特徴による交互作用項を投入し、分析を行った。

② インタビュー調査

2015年5月～2015年9月に調査を実施した。T1とT2の両質問紙調査に回答した受け持ち訪問看護師を対象にインタビュー調査を実施した。質問紙調査で得られた回答をもとに、目標の立案意図や、目標達成に至るまでの各専門職との関わり、達成度の評価・判断に関する情報について、一目標を一ケースとして構造化面接を行った。分析では、インタビュー内容を逐語録にし、ケースの経過を時系列にまとめた。時系列のまとめから、専門職による介入および利用者や介護者の特徴を見出し、これらの特徴でケースを分類した。

③ 縦断前向き質問紙調査とインタビュー調査の結果の統合

縦断前向き質問紙調査で得られたケアの特徴による連携のしやすさと目標達成度との関連に、インタビュー調査から明らかになったケースの特徴はどのように関係しているのかを明らかにするため、ケースの特徴で目標を再分類しなおし、【生活支援】と【処置観察】の目標別に、横軸がT1における連携のしやすさ、縦軸がT2における目標達成度の散布図にてケースの分布を確認し、解釈を行った。

結果

調査に参加意向を表明した 12 事業所のうち、7 事業所からデータが収集された。T1 で質問紙に回答のあった 42 利用者のうち、T2 までに状態改善による訪問看護の利用終了、病院・施設入所、死亡した者は 15 名であり、残りの 27 名と基本属性に有意な差はなかった。

① 縦断前向き質問紙調査

T1 と T2 の両質問紙に回答が得られた利用者 27 名のデータを分析対象とした。利用者のうち、女性は 13 名 (48.1%) であり、平均年齢 78.9 歳 (標準偏差 11.3, 以後 Standard deviation : SD とする, 範囲 54—99) であった。利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した連携のしやすさ (J-RCS スコア: $n=27$) は、平均 3.58 (SD 0.53, 1—5) であった。T1 では一利用者あたり平均 3.26 目標が立案されていた。T2 における目標達成度の評価は、平均 0.77 (SD 1.11) であった。

T1 で立案された 27 利用者 88 目標をケアの特徴で分類した結果、「身体徴候・症状の観察」「治療・医療処置の実施」「医療機器・薬剤の管理」をサブカテゴリに含む【処置観察】を行う目標と、「日常生活動作の促進」「心理面・環境面のサポート」「介護負担の軽減」をサブカテゴリに含む【生活支援】を行う目標に分類された。

二変量解析では、J-RCS スコアと目標達成度の間に有意な相関関係はなかったが (Pearson's $r = .243$, $p = .053$), 線形混合モデル分析の結果、J-RCS スコアとケアの特徴の交互作用項が目標達成度と有意な正の関連を示した (標準化回帰係数 1.146, 95%信頼区間 .228—2.065, $p = .015$)。交互作用が認められたため、ケアの特徴である【生活支援】と【処置観察】毎に J-RCS スコアの単純主効果検定を行ったところ、【生活支援】の目標では、J-RCS スコアの単純主効果は有意であった ($F(19) = 1.900288$, $p = .039$)。一方で、【処置観察】の目標では、J-RCS スコアの単純主効果は有意でなかった ($F(22) = 0.780383$, $p = .731$)。脱落した利用者 15 名のデータを加えて、全 42 利用者 135 目標について、Intention-to-treat 解析を行った結果、15 名のデータを加えない分析と同様の結果を得た。

② インタビュー調査

27 利用者 88 目標のうち、24 利用者 80 目標について、受け持ち訪問看護師 20 名から具体的な経過のデータを得た。その結果、(A) 他職種と目標達成に向けた連絡や相談を行った、(B) 訪問看護師のみで対応できた、(C) 利用者や介護者のコンプライアンスが良好だった、(D) 利用者や介護者の意向や状況の把握が難しかった、(E) 利用者避けられない状態の悪化があった、の 5 つの特徴でケースが分類された。

③ 縦断前向き質問紙調査とインタビュー調査の結果の統合

質問紙調査で明らかとなった【生活支援】と【処置観察】の目標における連携のしやすさと目標達成度との関連について、さらに深く解釈するため、インタビュー調査で得られたケースの特徴を踏まえて散布図にて分布を確認し、解釈を行った。その結果、【生活支援】と【処置観察】の両目標において、(A) 他職種と目標達成に向けた連絡や相談を行ったケース、(C) 利用者や介護者のコンプライアンスが良好だったケース、(D) 利用者や介護者

の意向や状況の把握が難しかったケース、(E) 利用者に避けられない状態の悪化があったケースが存在した。このうち、(A) と (C) のケースは、T1 で連携しやすい場合、連携しにくい場合のどちらにも分布し、目標が達成されていた。一方、(D) と (E) のケースは、T1 で連携しにくい場合に分布し、目標が達成されていなかった。また、【処置観察】の目標のみに、(B) 訪問看護師のみで対応できたケースが存在し、多くのケースで、T1 で連携しにくい場合でも目標が達成されていた。また、(E) 利用者に避けられない状態の悪化があったケースは、【処置観察】の目標の場合のみ、T1 で連携しやすい場合でも目標が達成されていなかった。

考察

訪問看護サービス利用者の受け持ち訪問看護師が評価した、受け持ち訪問看護師以外の専門職との連携のしやすさが、ケアの特徴によって、利用者へのケアにおける目標の達成度にどのように関連するのかを明らかにするため、質問紙調査とインタビュー調査を行い、以下の結果を得た。

- 1) 受け持ち訪問看護師が利用者に立案する目標には、【生活支援】を行う目標と【処置観察】を行う目標があった。
- 2) 【生活支援】の目標では、受け持ち訪問看護師が連携しやすいと感じているほど、利用者の目標が達成されている傾向がある一方で、【処置観察】の目標では、連携のしやすさと目標達成度に関連がなかった。
- 3) その理由として、【処置観察】の目標には、連携しにくい場合でも訪問看護師のみで対応でき達成される目標があることや、連携しやすい場合でも利用者に避けられない状態の悪化があり達成されなかった目標があることが影響していると考えられた。

本研究は、訪問看護師が訪問看護師以外の専門職と連携しやすいことが具体的にどのような場合に目標達成度を高めるのかを明らかにすると共に、訪問看護師によるケア介入方を具体的に提示するものであり、これらの知見は今後の訪問看護の発展に資するものであると期待された。